

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：平成 18 年度～平成 20 年度

課題番号：18402009

研究課題名（和文） アジア諸社会における主婦化の比較研究：
近代化とグローバル化によるジェンダーの変容研究課題名（英文） A Comparative Study of Housewifization in Asian Societies:
Gender Change in the Process of Modernization and Globalization

研究代表者 落合恵美子 (OCHIAI EMIKO)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：90194571

研究成果の概要：

近代化とグローバル化の只中にある現代のアジア諸社会を対象に、そのジェンダーの変容を「主婦化」をキーワードとして、フィールド調査による実態把握、および諸社会間と欧米・日本との比較や歴史的検討を踏まえた理論的検討の両面から解明を試みた。成果として、現代アジアのジェンダーの変容が、「親密圏と公共圏の再編過程」、すなわち家族の変容、福祉国家の生成と変容、グローバル化と国際移動が絡まりつつ進行する過程のなかで生じていること、地域的差異はこれらの諸要素の関係によって規定されること、グローバル化のなかで市場原理も取り込みつつ家族の役割が強調される「家族主義的福祉レジーム」と呼ぶべき状況が認められることなど、変容の性格と歴史的意義を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
18 年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
19 年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
20 年度	2,900,000	870,000	3,770,000
年度			
年度			
総計	13,100,000	3,930,000	17,030,000

研究分野：社会科学B

科研費の分科・細目：ジェンダー

キーワード：アジア、ジェンダー、家族、グローバル化、近代化、主婦、家事使用人、国際結婚

1. 研究開始当初の背景

女性は近代になって主婦になった（主婦化）、という認識は、欧米や日本のジェンダー研究の基本枠組みとなっていた。しかしこの枠組みが、アジアの他地域でも妥当するかどうか、検証した研究はほとんど無かった。また 1970 年代以降、欧米ではこの動きを反

転させる脱主婦化の動きが進んだが、経済的には欧米と遜色のない日本において、その動きが停滞していることは大きな謎と言われていた。急速な経済発展により都市中産層を中心とした近代社会の構造が成立しつつある現代のアジアにおいて、女性は「主婦」になろうとしているのか、その反対なのか、実証研究に着手すべき時だと思われた。

2. 研究の目的

「主婦化」仮説は日本以外のアジア諸地域でも妥当するのか、という問いを立て、現代および歴史の両面からこの問いに実証的な答えを与えようとするのが、本研究の目的であった。

しかし研究が進行するにつれ、問いはより一般化されたものとなり、近代化とグローバル化の過程にある現代のアジア諸社会において、ジェンダーはいかに変容しているか、その過程を規定しているロジックは何か、を探ることが目的となっていく。

3. 研究の方法

1) 現代から将来へ向けての変化の解明を課題とする現代のアジア諸社会での現地調査を中心とする一方で、近代化が開始して以来の1世紀以上を扱う歴史研究も行い、両者の連続性を常に意識するようにした。

3) 現地調査の主な対象地域は、インド、インドネシア、台湾、中国、シンガポール、香港、タイ、ミャンマー、韓国、ベトナム、カタールなどであった。

4) 現地調査での主な研究方法は、①資料収集、②質問紙を用いる半構造化されたインタビュー調査、③自由なインテンシブ・インタビューであった。

5) 現地調査では、現地の研究者との共同研究を原則とした。すでに密接な協力関係にあった韓国、中国、タイなどの研究者に加えて、インド、台湾、インドネシアで新しいネットワークを開拓し、ベトナム、シンガポール、インドネシアではNGOとの共同研究も実施した。

6) 定期的に研究会を開催し、現地調査の成果の共有と理論的検討を行った。

7) 最終年度には国際シンポジウムを開催し、すでに強力な研究協力のネットワークを形成していたパートナー研究者を招へいして、東アジア・東南アジア・南アジアにおける経験の共有と理論枠組みの構築に努めた。

4. 研究成果

インド調査

カーストと密接に関わった家事の分業の実態から、家事とは何かという理論的考察を深めることができた。また数世代にわたり主人の家に住み続ける家事使用人から、業者を通じて雇用する少数民族の家事使用人やケアワーカーへの変容を目の当たりにすることができた。

インドネシア調査

母性概念が国家により強調され、女性運動の中でも重要な意味を付与されている点に、戦前の日本との共通性があった。またイスラム教が反西洋・反フェミニズム運動を指導する一方で、貧しい母子のための保育所運動など草の根レベルの運動の宗教的バックボーンともなっている両義性が見られた。

中産層では自国出身の家事労働者の雇用が普及している。

台湾調査

家事・介護労働者の雇用と越境結婚が盛んであり、グローバル化がジェンダーに大きな影響を与えている社会と言える。ただし国家による規制が強かったグローバル化であり、外国人労働者の雇用は主に介護のためであって育児のためは難しく、出身国についての統制も厳しい。他方、外国人妻自身が運営に参加するNGOもできている。

中国・日本調査

国際結婚で日本に来る中国人女性を最も多く出している東北地方で現地調査を行い、中国と日本を結ぶ業者のネットワークの在り方、現地の女性と日本に来た女性との間に認識ギャップが生じる理由などを解明した。また日本にいる中国人妻や業者でのインタビュー調査を行い、経済的理由とはひとくくりにできない女性自身の主体性を見出すことができた。この調査では中国人留学生が重要な役割を果たした。

中国調査

東北中国における主婦の誕生について、現地の研究者との協力により調査を行った。新聞社が組織した「好太太倶楽部」での集団インタビューでは、2000年代に入ってから単位の改変による失業がきっかけとなって主婦となる女性が生じていること、しかし主婦になったことを肯定する言説（夫の健康のため、子供の教育のため）が生じていること、非常に裕福な高級専業主婦も誕生していることなどが明らかになった。

ベトナム調査

台湾チーム、韓国チーム、ベトナムチームとの共同により、ベトナムからアジア各地に出ていく労働移動や結婚移動について送り出し地域の村を訪ねて、本人や家族のインタビュー調査を実施した。また質問紙調査も実施した。日本滞在経験者は研修生としての就労経験者がほとんどであった。

シンガポール・インドネシア調査

シンガポールのNGOとの協力により、シンガポールでの就労経験のあるインドネシア人家事労働者を対象とした質問紙調査を実

施した。またシンガポール側とインドネシア側のシェルターを訪問した。

韓国調査

ライフヒストリーの聞き取りにより、高齢女性たちの家族生活やセクシュアリティの経験について、データを収集した。

タイ・ミャンマー調査

タイで就労するミャンマー人家事労働者について、タイ国内とミャンマーの出身地域との両方でインタビュー調査を実施した。ミャンマーからの出稼ぎについての調査は国際的にもほとんど手つかずであったので、多くの新しい事実が解明された。

以上のような現地調査と資料分析、文献研究から、以下のような理論的成果が得られた。3年間の研究の結果として、明らかになったのは以下のようなことである。

1. ジェンダーの変容は、家族の変容、福祉国家の生成と変容、グローバル化と国際移動という、3者が密接に絡まり合って進行している現代世界における親密圏と公共圏の再編成という過程の中で生じている。各地域でこれらの要素がどのように組合さっているかによって、ジェンダーの変容は異なるかたちで現象する。
2. 現代アジアにおける共通の条件は、経済的後発地域であることによる福祉国家の弱さである。換言すれば家族が福祉を担うしかない「家族主義的福祉レジーム」ということである。
3. しかしそれが女性へのケア負担の集中と主婦化を招くかといえ、さらに別の条件が加わる。グローバル化により外国人家事・介護労働者を受け入れることにより、ケア負担のかなりの部分を外国人に担わせ、自国の女性は就労を継続する社会もある（シンガポール、香港など）。他方、グローバル化に制限が設け、女性の主婦化が起きて固定化する社会もある（日本がその典型）。グローバル化の影響が一部の階層にまでしか届かず、両方のトレンドが同時に見られる社会もある（台湾、タイなど）。
4. 日本におけるジェンダー変容の停滞は、欧米諸社会とアジア諸社会とのちょうど中間の時期に近代化を経験したため、主婦化が起こり、性別分業的な近代家族が成立して、それが制度的なバックアップも受けて固定化したことによる。これに対して、他のアジア諸社会では、近代

家族が成立する十分な期間が無いままにグローバル化時代に突入したため、伝統的な家事労働者が消滅するかもしれないのうちに外国人労働者への交替がスムーズに起きた。アジアにおける近代は「圧縮された近代」と言われるが、圧縮の程度がその後の経路にも決定的な影響を及ぼす。

5. 国際結婚はケア役割の外国人への振り分けという点で、外国人家事・介護労働者の受け入れと連続する面がある。
6. 中国とインドという大国では、外国人家事・介護労働者を受け入れるかわりに、国内の広大な農村部や貧困地帯出身の家事・介護労働者を都市中間層が雇用している。しかしこれは伝統のままというわけではなく、雇用のしかたや身分関係、出身地などが変化している。
7. ジェンダーの変容に影響を与えるもう一つの大きな要因が、教育である。社会の変容とグローバル化に対応できる人材に子供を育てるため、自ら望んで主婦となる女性たちも多く、社会に出現している。グローバル規模での人間再生産の様式の変化が、ジェンダーの変容に幾重にも影響を与えているのである。

最も鮮明に見えてきたのは、制度的枠組みや政策の重要性である。保育所や高齢者施設の建設、労働や税の枠組みや、外国人労働者政策が、各社会におけるジェンダーの再編成に強い影響を与えている。グローバル化の時代ではあるが、国家の役割がクリティカルであることが確認された。

研究成果は、すでに書籍3冊（英語1冊、日本語2冊）のかたちにとまとめて公刊した（Emiko Ochiai and Barbara Molony eds, *Asia's New Mothers: Crafting Gender Roles and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies*, Global Oriental, 2008.; 落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編、『アジアの家族とジェンダー』勁草書房、2007; 落合恵美子・上野加代子編『21世紀アジア家族』明石書店、2006）。日本語の2冊は、それぞれ中国語と、タイ語と韓国語に翻訳され、数か月以内に出版される予定である。本研究は国際共同研究であったが、その成果もまた国際的に共有されたこととなったのは嬉しいことである。もちろん学術論文の成果も多く、海外の学会での発表も行った。また、各地でのインタビュー調査の記録は、ケース集としてまとめた（個人情報保護のため公開はしない）。

以上のような学術的成果に加えて、共同調

査における協力を通じての、アジアにおけるジェンダー研究のネットワーク形成にも、本研究は大きな成果をもたらした。本研究が形成したネットワークを土台として、すでに二つの科研費プロジェクトが実施されている。また、京都大学グローバルCOEプログラム「親密圏と公共圏の再編成」は、学術的にも組織的にも本研究の成果の上に可能になったものと言うことができる。

最終年度に開催予定であった国際シンポジウムは、上記グローバルCOE等の共催により実施することとなった。「いま構築されるアジアのジェンダー」と題した本シンポジウムの成果は、本研究の最終成果として日本語および英語で公刊すべく、現在準備を進めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

1. 落合恵美子、「アジアにおけるケアネットワークと福祉ミックス——家族社会学と福祉社会学との結合」、『家族研究年報』33号、2008、pp. 3-20、査読あり。
2. 小山静子、「日本教育史の研究動向(近現代)」、『日本の教育史学』51集、2008、pp. 125-133、査読なし。
3. 橋本(関)泰子、「タイ・モン族における精霊信仰とエスニック・アイデンティティ」『社会学研究科紀要』8, 2008, 1-20、査読なし。
4. OCHIAI, Emiko, “The Postwar Japanese Family System in Global Perspective: Familism, Low Fertility, and Gender Roles,” U.S.-Japan Women’s Journal, Vol. 29, pp. 3-36, 2007. 査読あり
5. 栗屋利江、「「サバルタン・スタディーズ」と南アジア社会史」、『メトロポリタン史学』3号、2007、査読なし。
6. 中谷文美、「わたしの布は誰のもの?—インドネシア伝統染織の〈ファッション化〉をめぐって」『社会人類学年報』33号、2007、pp. 1-32、査読あり。
7. 山根真理、「『ワークライフ・バランス』論によって見えるものと、見えなくなるもの」『家族関係学』26巻、2007、pp. 43-45、査読なし。
8. 小山静子、「教育家族の時代」日本家政学会家族関係部会誌『家族関係学』第25号、2006、pp. 3-36、査読なし。

[学会発表] (計16件)

1. OCHIAI, Emiko, ‘Towards Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st

Century Asia’ Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia Kick-off Symposium, October 25, 2008, Kyoto University.

2. OCHIAI, Emiko, “Gender Role Changes and Childcare Networks in East and Southeast Asia: Results from a Comparative Research of Six Societies,” The Arab family in the 21st Century, May 15, 2008, Doha.

3. OSHIKAWA, Fumiko, “The factors behind working wives: family strategy of Indian urban middle class”, 京都大学 GCOE 共催国際シンポジウム、2009年1月8日、国際日本文化研究センター。

4. HIMEOKA, Toshiko, ‘Die feministische Bewegung und der Wandel der Alltagskultur in Japan und Deutschland aus vergleichender Sicht’, (1968 in Japan, Deutschland und den USA: Politischer Protest und kultureller Wandel, JAPANISCH-DEUTSCHES ZENTRUM BERLIN [JDZB], March 6, 2009, Berlin.

5. 姫岡とし子、「ドイツにおける労働とジェンダー関係」、ジェンダー史学会 シンポジウム「労働のジェンダー史」、2008年11月30日、東京大学。

6. 姫岡とし子、「分科会 『仕事の人類学』が拓く地平—労働・ジェンダー・社会変容」コメント、日本文化人類学会第42回研究大会、2008年6月1日、京都大学。

7. UENO, Kayoko, ‘Strategies of Resistance: Migrant Domestic Workers in Singapore’, 京都大学 GCOE 共催国際シンポジウム、2009年1月8日、国際日本文化研究センター。

8. 上野加代子、「舞台裏のアイデンティティ・ポリテイクス—シンガポールにおけるインドネシアとフィリピン外国人家事労働者の調査から」、2008年度第1回医療社会学研究会例会、2008年6月14日、キャンパスプラザ京都龍谷大学。

9. 上野加代子、「抵抗のストラテジー—シンガポールの家庭で就労する外国人家事労働者」、アジア・ライフコース研究会、2008年11月22日、愛知県立大学。

10. UENO, Kyoko, ‘Lives of ex-Indonesia overseas domestic workers. Transnational Migration of Vietnamese Women in Asia: Experiences, Rights and Citizenship’, Institute for Social Development Studies, May 9 2008, Hanoi, Vietnam.

11. YAMANE, Mari, ‘From the Results of Asian Life Course Project’, 京都大学 GCOE 共催国際シンポジウム、2009年1月9日、国際日本文化研究センター。

12. 山根真理・洪上旭、「韓国における高齢者のライフコースと社会変動—2004年キョンサン市インタビュー調査データの再分析を通して—」、日本家政学会家族関係学部会、2008年10月12日、大妻女子大学。
13. 山根真理、「現代韓国の子育てと母性—日本との比較視点において」国際シンポジウム東アジアにおける現代化と女性、2008年1月14日、名古屋。
14. NAKATANI, Ayami, “The Culture of Housework: women as mothers and housewives in the Netherlands, Japan and Indonesia”, 京都大学 GCOE 共催国際シンポジウム、2009年1月9日、国際日本文化研究センター。
15. OCHIAI, Emiko, “Asia’s New Mothers: Gender Role Changes and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies,” International Symposium on East Asian Comparative Research held at National Taiwan University, November 24–25, 2007, Taipei.
16. 小山静子、「自叙伝を通してみた人間形成史の研究」教育史学会コロキウム、大東文化大学、2006年9月17日。

〔図書〕(計24件)

1. OCHIAI, Emiko, *Asia’s New Mothers: Crafting Gender Roles and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies*, Emiko Ochiai and Barbara Molony eds, Global Oriental, 2008, pp. 363.
2. 首藤明和・落合恵美子・小林一穂編『分岐する現代中国家族』、明石書店、2008、pp. 363.
3. 小山静子、『愛国婦人』(明治期復刻版)、柏書房、pp. 238.
4. 小山静子、『「育つ・学ぶ」の社会史』、藤原書店、2008、pp. 299.
5. 小山静子、「教育の近代化とジェンダー」pp. 183–193 と「女学生の誕生」pp. 195–208 担当、『教育の社会史』(共著)放送大学教育振興会、2008、pp. 257.
6. 小山静子、『女性と高等教育』昭和堂、2008、pp. 348.
7. 姫岡とし子、「はしがき」「近代化過程における労働者のジェンダー化—ドイツにおける社会保険制度の成立とジェンダー—」「コラム メタファーとしての売買春」「ドイツにおけるジェンダーの歴史学」『ジェンダー』、ミネルヴァ書房、2008、pp. i–vii, 207–248, 224, 20–23.
8. 姫岡とし子、『ヨーロッパの家族史』、山川出版社世界史リブレット、2008、pp. 90p.
9. UENO, Kayoko, “Foreign Domestic Workers in Singapore”, Ochiai and Molony eds., *Asia’s New Mothers*, Global Oriental, 2008、pp. 140–156.
10. YAMANE, Mari and Hong Sang Ook, ‘A Comparative Study of Childcare and Motherhood in South Korea and Japan’, 10. Ochiai and Molony eds., *Asia’s New Mothers*, Global Oriental, 2008, pp. 71–87.
11. HASHIMOTO (Seki), Hiroko, “Housewifization and Changes in Women’s Life Course in Bangkok”, in Emiko Ochiai and Barbara Molony eds., *Asia’s New Mothers: Crafting Gender Roles and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies*, Global Oriental, Kent, 2008, pp. 110–128.
12. 落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編、『アジアの家族とジェンダー』勁草書房、2007、pp. 183.
13. 小山静子、「解説」『貴女之友』(復刻版)柏書房、2007、pp. 4200.
14. 小山静子、『教育の社会史』(辻本雅史編)、放送大学教育振興会、2007、pp. 257.
15. 小山静子、「日本教育史研究におけるジェンダー」pp. 168–173 担当、『教育史研究の最前線』(共著)日本図書センター、2007、pp. 345.
16. 橋本泰子、『越境する移動とコミュニティの再構築』(佐々木衛編)、東方書店 2007、pp. 270.
17. 中谷文美、『ジェンダー人類学を読む』(宇田川妙子・中谷文美編)、世界思想社、2007、pp. 392.
18. 落合恵美子、『市民社会と法』(棚瀬孝雄編・共著)、ミネルヴァ書房、2007、pp. 301.
19. 落合恵美子、『グローバル化時代の人文科学』(紀平英作編)、京都大学出版会、2007、pp. 452.
20. 落合恵美子、『地域研究の課題と方法—アジア・アフリカ社会研究入門—』(北原淳他編)、文化書房博文社、2007、pp. 254.
21. 粟屋利江、『南アジア史』第3巻南インド(辛島昇編)、山川出版社、2007、pp. 460.
22. 落合恵美子・上野加代子編、『21世紀アジア家族』明石書店、2006、pp. 254.
23. 小山静子、「女子教育を超えて」pp. 15–51 担当、(共著)『女子教育、再考』冬弓舎、2006、pp. 236.
24. 中谷文美、『ミクロ人類学の実践』(田中雅一・松田素二編)、世界思想社、2006、pp. 466.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

落合 恵美子 (OCHIAI, Emiko)

研究者番号 90194571

京都大学・文学研究科・教授

(2)研究分担者

小山 静子(KOYAMA, Shizuko)
研究者番号 40225595
京都大学・人間・環境学研究科・教授
押川 文子(OSHIKAWA, Fumiko)
研究者番号 30280605
京都大学・地球研究総合情報センター・教授

(3)連携研究者

姫岡 とし子(HIMEOKA, Toshiko)
研究者番号 80206581
筑波大学・人文社会科学研究科・教授
藤田 道代(FUJITA, Michiyo)
研究者番号 00219023
大手前大学・社会学部・教授
上野 加代子(UENO, Kayoko)
研究者番号 50213377
徳島大学・総合科学部・教授
粟屋 利江(AWAYA, Toshie)
研究者番号 00201905
東京外国語大学・外国語学部・教授
山根 真理(YAMANE, Mari)
研究者番号 20242894
愛知教育大学・教育学部・教授
橋本 泰子(HASHIMOTO, Hiroko)
研究者番号 80236075
四国学院大学・社会学部・教授
中谷 文美(NAKATANI, Ayami)
研究者番号 90288697
岡山大学・社会文化科学研究科・教授